

はじめに

教育システムが確立していない社会教育において、自然に係わる活動を環境教育として捉えることができるのか、教育の視点から現状の分類をすると共に、新たな形態を提唱する根拠として幼児期の安心感の蓄積に注目し、自然が私達に与える影響力とインタープリテーションの係わりについて道徳的観点から考察してみました。

研究の内容

インタープリテーションの現状

動機づけ

近年の自然を対象とした様々な事業では環境教育という名のもとに、学校で行っている教科的な指導をすることが多くなっています。また、歴史が浅く学校教育のように社会的に認証されたカリキュラムが確立されていない社会教育では、目標や長期的なビジョンを持たず、単発で行われる指導形態が主流を成しています。

学校では授業の前に様々な形での動機づけがあり、授業本体は目標を持って導入-展開-終末という流れの中で進み評価が伴います。

冒頭に述べたような社会教育環境で行われている自然との触れ合いを環境教育というのであれば、ネイチャーゲームや手作り教室、本稿の主題であるインタープリテーションなどはすべて授業以前の動機づけと考えられます。

ゲストティーチャー的役割

動機づけばかりしていて授業に入らず展開や終末そして評価もないのであれば、しっかりと目標を持った教育とは言い難いのですが(花や鳥の名前覚えやお楽しみゲームばかりしても仕方がないというのはこのことです)、強いて環境教育に位置づけると、社会科見学などでよくある町の中などの仕事を紹介したり教えたりするゲストティーチャーのように、単元のピンポイントを抑える役割ということになります。

しかしゲストティーチャーが行う授業をインタープリテーションというのであれば、インタープリター養成講座といわれるものは少し不可解なものになります。なぜならゲストティーチャーはある意味でその道のプロであり、即席でできるようなことではないからです。自然を知る学習のゲストティーチャーは自然関係のプロから選ばれるべきものであり、数日間の研修などで突然自然のプロとしてデビューすることはかなり難しいと思います。

導入部分

また環境教育指導者養成講座と呼ばれているものも各地で盛んですが、上述の観点から見れば動機づけを行う人を養成する講座ということになります。しかし指導者ということですので、1つの授業を受け持つという視点で見れば、動機づけは導入の中で行われることもあるので導入を手がける人の養成と見ることができます。

それにしてもインタープリテーションをしない環境教育指導者というのは存在しないので、インタープリターの社会的地位や将来性を考えると、導入が一つの職業として成り立っていく未来を持つとは思えず、自身の立場は非常に不安定なものにならざるを得ません。

専門技能

ではインタープリテーションを環境教育と切り離してみるとどうでしょうか。インタープリテーションとは説明・解明・解釈・理解という意味であることが辞書には載っています。このことに注目するとインタープリテーションは自然関係だけではなく広く多分野に渡って当てはまるものであることが分かります。つまり自然公園に於けるインタープリテーションといえば自然公園(自然)の説明をする、または解釈をすることになります。当然のことながら経験と幅広い見識を必要としますので、インタープリテーションとは多分野にわたる専門技能であるといえます。

インタープリターの資質

説明と理解

・人に物事を説明するというとはどういうことでしょうか。

特別な理由で説明義務が生じている時の単なる義務履行でない限り、説明した後には相手の理解ということが続きます。相手に理解してもらわないことには説明する意味がありませんので、説明と理解は表裏一体の関係にあるといえます。インタープリテーションの意味にもこの理解という言葉が出てくるのは当然のことでしょう。

・人に理解してもらうためにはどのようにしたらよいのでしょうか。

相手に気持ちの受け入れ態勢が整っていること、つまりその物事に積極的に係わりとうする気持ちを持っていることが必要です。一般的には相手の興味をそそるようなことをしたり、相手と同じ立場に立つと良い結果が得られるようです。学校では一斉注入式授業を受けた生徒よりも、相互作用を重視した体験学習や問題解決学習などの学習方法で授業を受けた生徒の方が理解度が高いといわれています。花や動物や鳥などを材料として大いに利用し相手の気持ちを自然に向けることが大切です。

感性の発現

気持ちの受け入れ態勢が整ったところで初めてインタープリテーションがその効果を発揮できるようになります。

気持ちが自然の方に向き、見たり聞いたり触ったりすることで五感が研ぎ澄まされ、感性が発現します。それに達するには個人差があり、1時間の人、半日の人、1日の人などさまざまですが誰でも必ずいつかは発現し感じることを求めるようになります。

感性が豊かになると自然を感じることの喜びも多くなり、同じものに感動し共感する仲間を求め、自然を通してお互いを認め合い、安心感を蓄積させます。

その結果心のゆとりが生まれ、目が外に向けられ周囲に対する興味関心はより一層強くなります。

このような状態が物事を吸収することを容易にし、相手のことを理解しようとする気持ちを芽生えさせるのです。吸収することは喜びであり好奇心に輝いた目は説明者の心をも捉え、まさしく注入ではない個別的な相互作用が生まれています。

心の垣根

インタープリテーションは心の変化に始まり心の変化に終わるといってもいいでしょう。一人一人の気分をくみ取り、心の垣根を低くして感性の発現を見るようにすることが最大の技術です。その技術は自然を通してそれを行う人の経験に大きく左右されます。そこでは知識も必要ですが何よりも大切なことはその人の生きざまです。幅広い知見と生き方考え方です。人間性が大いに問われる専門的分野なのです。

自然に接することにより感性を発現させた人が、日々より良く生きようとしているインタープリターの心に触れた時、共感や喜びを通して、互いに信頼されたり認められたりすることの素晴らしさや嬉しさをを実感します。この過程によって得られるものは幼児期に受ける母親の愛情とは違ったものですが、形を変えた心を満たすものとして得ることができます。

ある程度心が満たされ安心感が蓄積することにより、一層の好奇心や豊かな感性が芽生え、コミュニケーションを通して、相手の気持ちを理解できる人となる可能性が生まれます。

教育活動

社会や文化は人間が築きあげてきたものです。教育は文化の伝承であり、自然を通して人間味ある人々を世の中に排出することは、とりもなおさずより良い社会を築く土台となります。人を育てることを教育といわずしていったい何を教育というのでしょうか。学校では教科や領域の前提として、また世の中では社会や文化の前提として、より良く生きようとする人作りが不可欠です。

自然公園に於けるインタープリテーションは人作りに強い影響力を持つ自然を対象にしています。このことが教育である所以です。自然は単なるスポーツやレジャーの場としてだけでなく、人間疎外といわれるこの時代に人間性豊かな人を育てるための土台として心を満たすことのできる可能性を持つものであり、それを説明し理解してもらう過程はまさに人間形成に寄与する教育活動なのです。

安心感の蓄積

家庭教育

本来幼児期の人とのコミュニケーションやそれらから生まれる心の安心感や充足感の蓄えなどは家庭教育によって自然に行われてきたことです。しかし、現在は社会構造の変化から大家族は崩壊し、共働きの家庭が増え、乳幼児は保育園に預けられ、マスメディアの

発達により家庭内にまで社会のあらゆるできごとが侵入し、本来治外法権であるべき家族の絆はその価値観を失いつつあります。このような社会状況下では家庭教育を忘れがちになり、親が不在でも子どもは育つと錯覚し、子ども達は乳幼児期に必要な母親とのコミュニケーションや溢れんばかりの愛情を十分に受けることがむずかしくなっているのです。

幼児期の愛情の欠如は大人になっても不安や緊張といった精神面の不安定さを作る原因となりやすく、他人とのコミュニケーションがとれないまま孤立するケースも多々あります。人の気持ちを理解することができず、人に愛をそそぐこともできず、心を閉ざして現在を生き抜いている人は数多くいることでしょう。現在はそのような人達が母となり父となっている時代です。

幼児期の不足分はお金や勉強では埋めることはできません。母親の愛情が必要なのです。一人の人間として認められ、ゆったりとした安心感溢れる中で成長することが必要なのです。

心のタンク

愛情不足は年を重ねるごとに取り返しのつかないことになっていきます。子どもがいくつになっても母親にその能力があるのであればそれに代わるものはありません。しかし、それが叶わぬ人でも自然が与えてくれるものを愛情のタンクに取り込むことはできます。そのことにより、愛情は水かさを増しあたたかもタンクを満たしているかのような気持ちになります。

自然が与えてくれるものは、受ける愛でありまた与える愛でもあります。包まれる思いであり、小さきものを慈しむ思いです。時には奪う愛であることもあります。これらは母親の愛情とは異質なものですが、何となく勇気と自信が湧いてきます。

心が満たされることで身近な人とのコミュニケーションが生まれ、心の交流が持続してお互いの気持ちに作用するようであれば、自然が与えてくれたものと母親の愛情は融合し少しずつ本物の愛に近づいてくるように思います。

自然の力(The Forth Of Nature)

幼児期の安心感の充足は母親とのコミュニケーション以外には不可能ですが、その不足分を補うことができる可能性を自然は持っており、その自然が私達の気持ちに作用する影響力を自然の力のひとつと考えます。

自然の力に多くの人に接してもらい、安心感の蓄積を通して豊かな人間性が発現するきっかけを提供することはインタープリターの使命に叶うものです。

インタープリテーションによる理解ということを探求した結果、人の心のあり方の大切さを痛感しています。人々の不安と緊張を解きほぐしたり乳幼児期の不足分を補う力を持っている自然は、より良い社会を作りだすことのできる人間味ある人を増やす可能性を持っているのです。

インタープリテーションの位置づけ

包括的な分野

このような考えのもとに行うインタープリテーションは、ゲストティーチャー的役割や導入部分だけのものではなく、また専門技能だけでもないそれらを包括する新たな分野として考えなくてはなりません。

自然を対象にするインタープリテーションは教育です。しかしそれは環境教育の一場面ではなく、人間形成に係わる生き方教育です。自然の力を大いに利用して、安心感の蓄積によって生き方に対するきっかけを提供できるような説明や解釈をする限り、教育としてのインタープリテーションの可能性は十分に発揮されると確信しています。

3分野4形態

以上のことを踏まえ現在の日本のインタープリテーションの位置づけというものを以下に示しました

現在行われているものを2つの分野(I・II)に分類し、それらに該当するものとして3つの形態(①・②・③)を示し、さらに新たに提唱する1分野(III)1形態(④)について表しています。

- I、自然公園に於けるインタープリテーションを環境教育と捉えるならば
 - ①単元のゲストティーチャー的役割
 - ②授業の導入部分(動機づけも含む)
- II、自然公園に於けるインタープリテーションを環境教育と区別して捉えるならば
 - ③自然案内人や自然解説員などの専門技能
- III、自然公園に於けるインタープリテーションを生き方教育として捉えるならば
 - ④安心感の蓄積とそれに伴うより良く生きようとするきっかけの提供

インタープリター(Interpreter)という言葉は日本では環境省が使い始めたもので、日本自然保護協会は当初ネイチャーエデュケイター(Nature Educator)とっていました。現在環境省はエコツアー実施(強化)に向けて動き始めています。当然のことながら現地案内人の必要性を打ち出しており、それらは上述の③に当てはまる形態です。また学校教育から見ると現状のインタープリターは上述の①と②の形態に当てはまります。

ここで新たに提唱した上述のIIIは学校教育の良い部分を社会教育に生かした新しい分野です。安心感の蓄積とそれに伴うより良く生きようとするきっかけの提供(上述の④)を行う者は、①・②・③を所有しています。言い換えれば①・②・③を習得しながら④に向かう、または①・②・③は④を行うための1分野であるともいえます。それとは別に④は①・②・③の基礎としてすべてを通して行うものでもあります。

現行のI・IIの分野であっても常に生き方教育に留意することによって、教育としてのインタープリテーションの位置づけが明確になり、近い将来の安定した社会的地位を確保できる可能性を持ちます。

まとめ

自然を通して安心感を蓄積する

以上述べてきたような自然の力を利用して、人の心の垣根を低くし安心感の蓄積によっ

てより良く生きるきっかけを提供することを「自然を通して安心感を蓄積する」と定義します。

自然を通して安心感を蓄積することは人間形成に係わる生き方教育です。学校教育ではすべての教科を通して強く行うべき教育の根底を成す道徳教育であり、社会教育ではより良い社会を築くための根拠として、そして家庭教育での乳幼児期の不足分を補い、現在の世の中に欠けている部分を修復することができる可能性として存在すべきものです。

教育とは人を育てることで、環境教育が教科であっても領域の扱いであってもインタープリターの行っていることには何も影響するものではありません。なぜなら家庭教育・学校教育・社会教育という大きな3つの教育分野すべてに共通しているものは人を育てるということだからです。

自然公園に於けるインタープリテーションは自然の力を大いに利用して、この殺伐とした社会環境にある人々の心に安心感を蓄積させることで、より良い生き方を探し求めるきっかけを提供するものです。それは健全な社会の営みや豊かな文化の伝承を実現するための近道でもあります。

今後の課題

日本ではインタープリテーションの定義がまだまだ確立されていないことを痛感します。職業としての社会的地位や将来を考えると、現状がどのような位置づけにあっても、学校での道徳教育的な立場を忘れず、常に人間形成に影響のあるような内容を心がけ、目標をたて、単発で終わらないように一つ一つ目標に向かって創意工夫していくことが大切でしょう。効果的なインタープリテーションを行うにはインタープリター1人に対して最大でも7人程度が適当と思われるので、エコツアー実施に当たっては相当数のインタープリターが必要になってくることが予想されます。このことは多くのインタープリターが直面する難門ですが、自然公園に於けるインタープリテーションの意義を十分に理解し、生き方教育に対する視点を数多く盛り込み、目標達成のための地道な努力を続けていくことを望んでいます。

今後この分野では、家庭教育や学校教育で見過ごされてきた人々を柔軟にフォローすることができる社会システムの構築に向けて、大学での新しい人材養成課程と連携しつつ、社会的に認証されるカリキュラム作成のための研究が待たれます。